The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	紫上の運命と明石の君 ： 「初音」巻を中心に
Author(s)	胡, 秀敏
Citation	詞林. 1992, 11, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67315
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紫上の運命と明石の君

――「初音」巻を中心に――

胡　秀敏

一

源氏物語における玉鬘十帖は、一見したところ光源氏と玉鬘の雅びやかな恋物語の展開が中心に描かれており、紫上も明石の君もそれほど大きな存在とはなりえないように見受けられる。しかし玉鬘十帖の中でも最も重要な位置を占める「初音」巻における二人の描かれ方は、実に印象的かつ対照的である。「初音」巻は、玉鬘十帖の第二帖に位置し、光源氏三十六才の栄華の一年を、月次形式をもって描く巻々の最初にあたっている。三谷栄一氏によれば、三条西実隆は毎年正月二日に「初音」巻を読むことを嘉例としたという（1）。確かに、巻の冒頭部はうららかな新春の風景を描くことから始まり、豪華な六条院世界の中でも一際めでたい春の殿の御前は、「生ける仏の御国」とまで賛嘆されている。しかし、すでに秋山虔氏のご指摘があるように、「初音」巻は、はじめて迎えた六条院の春の場面であるにもかかわらず、光と寿福に満ち溢れたはずの六条院世界にも影の部分が存在している（2）。とくに紫上と明石の君という二人の女性の対照的な存在に注目すべきと思われ、一見光源氏と玉鬘の華やかな世界の傍らに居ると見られる紫上と明石の君を分析することによって、物語第二部における六条院の徹底的変容に至るまでのありようが明らかになってくるように思われる。

春の御殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひて、生ける仏の御国とおぼゆ。（一一頁）

「初音」巻の冒頭（3）で、春の御殿は「生ける仏の御国」と讃えられたが、六条院の完成した時の記述を見ると、「辰巳は、殿のおはすべき町なり」（少女二七三頁）とあって、紫上は独立した町を与えられていないことがわかる。それは光源氏と同じ辰巳の町に住むことになり、その点からすれば、彼女は花散里や明石の君という妻たちとは別格の待遇を受けているもの（4）とも考えられようが、六条院四季の町を定める時に決められた紫上と春の町との結びつきは、必ずしも本人の意志によ

るものではない。「薄雲」巻における春秋の定めに際し、二条院に退出していた梅壺女御は春秋の優劣について光源氏から問いかけられた時、「あやしと聞きし夕こそ、はかなう消えたまひにし露のよすがにも思ひたまへられぬべけれ」（一八二頁）と、母六条御息所の亡くなった季節に因んで秋を選んだのに対し、紫上は「女御の秋に心を寄せたまへりしもあはれに、君の春の曙に心しめたまへるもことわりにこそあれ」（一八四頁）と、光源氏から定められて春を標榜させられることになったのである。そこには梅壺女御のような自己の内的必然によって春を主張する紫上の姿は見えない。あくまでも光源氏に擁護される人間としてここでの紫上は設定されているのである（5）。

さらに完成された六条院「春の御殿」には、将来中宮になる予定の明石の姫君も同居していることを忘れてはいけない。寝殿の西側に隣り合って住んでいる姫君は、后がねとしてその養育を紫上に委ねている唯一の娘である。「生ける仏の御国」とは、現世の極楽浄土を意味し、この世の人間としての悩み苦しみとは無縁の世界であり、そうした世界で、千年の齢を祝われた光源氏にとって、同じ「春の御殿」に住む明石の姫君こそめでたいわが世の永続の保証であった。したがって、「生ける仏の御国」と讃えられた「春の御殿」は、すくなくとも紫上一人が代表する町ではないことを確認しておきたい。

正月一日、参賀の客の立て混む騒がしさをやり過ごし、その夕方、光源氏は六条院の町々の女君を訪問してめぐるが、それに先立って紫上と寿歌を読み交わす。

（紫上）うす氷とけぬる池の鏡には世にたぐひなきかげぞならべる

（紫上）げにめでたき御あはひどもなり。くもりなき池の鏡によろづ代をすむべきかげぞしるく見えける

一見して分るように、紫上の歌は光源氏の歌の言葉を殆どそのまま取ったものである。光源氏の「うす氷とけぬる」という表現からまず思い出されるのは「朝顔」巻の贈答歌である。

（紫上）氷閉ぢ石間の水はゆきなやみ空澄む月のかげぞながるる

（地の文略）

（宮様）かきつめて昔恋しき雪もよにあはれを添ふる鴛鴦の浮寝か

（朝顔二一二頁）

この贈答歌について、朝顔の姫君への執心がもたらした光源氏と紫上との間柄の変容、紫上の心情のあり様をめぐって議論のあるところだが、真淵の新釈通り、紫上の歌は単純な叙景歌ではなく、彼女自身の痛切な想いが詠歌の風景に込められているものと理解できると思う。「朝顔」、「初音」巻ともに光源氏と紫上の贈答歌であることを考え合せれば、「初音」巻の「うす氷とけぬる」という言葉は「朝顔」巻の「氷閉ぢ」の表現を受けたものと考えられよう。そうすると、「氷閉ぢ」から「うす氷とけぬる」の歌への道程は、二人の和解への歩みになるようにも読み取れるが、しかし「氷閉ぢ」に対して「うす氷

とけぬる」と表現しているのは光源氏側であって、紫上も同じ認識を持っているとは限らない。このことは、贈答歌の結句「かげぞならべる」と「しるく見えける」との違いからも明らかであろう。この贈答歌について「よろづ代をすむべきかげ」は「世にたぐひなきかげ」の同語反復と理解されるのが普通であり、古注釈書の多くも、取り立てて項目を立てないようだが、『孟津抄』だけは「すむべき影ぞとは紫の源をさして祝たる也紫の我事をばをきてよめる尤面白」と記され、紫上の歌は光源氏ただ一人を称賛するものとして理解している。

新春早々、光源氏からめでたい歌を読みかけられてみれば、紫上もそれにふさわしい一通りの歌を応答しなければならない。「若菜下」巻において、光源氏がわが半生を述懐すると共に、紫上の幸福を語り聞かせたのに対し、

のたまふやうに、ものはかなき身には過ぎにたるよそのおぼえはあらめど、心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける。（若菜下一九〇頁）

と述べ、紫上は確かに光源氏の言葉を受けとめて、感謝しているようにも見える。ところが、すぐあとの「心に堪へぬもの嘆かしさのみうち添ふや」という言葉には、光源氏の考え方とは別に、彼女の厳しい人生認識が集約されているように感じられる。表面上光源氏に付随しているだけの姿は、この「初音」巻の贈答場面にもあてはまるのではないかと思われる。

このように、光源氏と紫上の贈答は、一見したところ、二人の幸せな将来を予見する歌のようにも見えるが、これから六条院に住む他の方々を訪れようとする光源氏であるだけに、こうしたはれやかに儀礼的な歌の詠唱によって、紫上を慰めておこうとしただけのようにも思われる（6）。一方紫上の返歌は、表面上は別として、その裏には「朝顔」巻と同じように、複雑な彼女の感情が封じ込められたものとして理解できよう。結果的にも、紫上は六条院体制の秩序を痛感せざるをえない立場になってしまったのである。したがって、この贈答歌がいかに空虚なものであったかは、そのすぐあとに明石の君を訪問する場面からも、さらに立証できると思う。

二

六条院の新春、光源氏は寝殿の西側に住む明石の姫君の許へ訪ねていく。そこには明石の君から入念な心遣いを施した新年の贈り物と文が届いていた。

姫君の御方にわたりたまへれば、童女、下仕へなど、御前の山の小松引き遊ぶ。若き人々のここちども、おきどころなく見ゆ。北の御殿より、わざとがましくし集めたる鬚籠ども、破籠などたてまつれたまへり。えならぬ五葉の枝にうつる鶯も、思ふ心あらむかし。

（明石君）
「年月をまつにひかれて経る人にけふ鶯の初音聞かせ

よ

音せぬ里の」と聞こえたまへるを、げにあはれとおぼし知る。言忌もえしたまはぬけしきなり。（源氏）この御返りは、みづから聞こえたまへ。初音惜しみたまふべきかたにもあらずかし」とて、御硯取りまかなひ、書かせたてまつらせたまふ。いとうつくしげにて、明け暮れ見たてまつる人だに、飽かず思ひきこゆる御ありさまを、今までおぼつかなき年月の隔たりけるも、罪得がましく心苦しとおぼす。

（明石の姫君）ひきわかれ年は経れども鶯の巣立ちし松の根を忘れめ

や

をさなき御心にまかせて、くだくだしくぞある。（一三一一四頁）

子の日といって、童下仕が御前の筑山で小松を引いて遊び、これを見る女房たちも浮き立つ思いであるが、そこには入念な心遣いを施した新年の贈り物と文が明石の君から届けられていた。明石の君の歌に詠み込まれた「松」「引く」「初音」はすべて新年を祝うのにふさわしいものであった。引用本文の前に光源氏と紫上の贈答歌を受けて「今日は子の日なりけり。げに千年の春をかけて祝はむに、ことわりなる日なり」とあり、元日と子の日が重なり合う新春だから、めでたさが一段と感じられる。初音の行事について『河海抄』は次のように注している。

十節記云正月子日登岳遙望四方得陰陽静気除憂悩之術也

又云引小松延遐年云々

初学記云歳首祝折松枝男七女二七

倚松樹以摩腰習風霜之難犯和菜羹而啜口期気味之克調

蓍蒿蹤蓋森陵岑

本朝事記云天安元年禁中有曲宴昔者上月之中必有此事時謂之子日遊今日之宴修旧迹者也

ゆく末も子日の松のためしには君か千年をひかんとそ思ふ

鑑三条太上皇

以上のほかに『和漢朗詠集』「子の日」の項目では、和歌三首がすべて松を引き千歳の寿命を祈る内容になっている。このようなめでたい儀式を下に敷いて、童たちが「御前の山の小松ひき遊ぶ」さまも明石の君の歌に響いている。しかしその歌にこもる明石の君の思いはわびしいものである。「薄雲」巻での母子別離以来、交わされることのなかった姫君の「初音」を聞かせよとの、明石の君の切ない気持ちが込められているし、「えならぬ五葉の枝にうつる鶯も、思ふ心あらむかし」もその心情をよく伝えているからである（7）。「五葉の枝にうつる鶯」も『河海抄』があげる『拾遺集』の歌、

松のうへになく鶯のこゑをこそはつねの日とはいふべかりけれ（『拾遺集』巻一・春・二二番）

の趣向を受けてのものである。この「思ふ心あらむかし」も『拾遺集』の歌の趣向を受けて、新春の鶯と初子の松を取り合せ、元日と初子の重なる新年を祝うものである。そして作り物の鶯には生母明石の君から引き離されている身の上の姫君が陰

喩されていることは言うまでもないであろう。このように、初子の日にちなみ松にかかわる祝い言葉をたくさん盛り込みながら、しかもそれと裏腹に明石の君の切ない思いを託すのが明石の君の歌である。

「薄雲」巻以来四年の年月が流れ、明石の君は六条院の人となったけれども、「初音聞かせよ」の歌からわかるように姫君との対面や文通が許されるわけではなかった。后がねの尊貴性を保つためそうせざるを得なかったとはいうものの、母子離別を強いられた明石の君の胸中を忖度する時、光源氏も良心の呵責に苛まれたに違いない。だからこそ、今日は元日と初子の日にちなんだ儀礼的な歌を贈ることによって、日常の六条院秩序の中で抑えられていた姫君への切ない思いを訴えることが許されたのであろう。明石の君の歌には、かつて「薄雲」巻の母子別れの日に「末遠き二葉の松に引き別れいつか木高きかげを見るべき」「生ひそめし根も深ければ武隈の松に小松の千代をならべむ」という明石の君と光源氏との間に交わされた贈答と響きあって一途に哀切な思いが込められているように思われる。

さて、この明石の君の歌に対する光源氏の、異常ともいうべき対応に注目しなければならない。光源氏は、明石の君から寄せられている明石の君の歌と「音せぬ里」の添え書きを見たところから、「罪得がまし」という痛切な感情を発していた。その歌によって明石の君から姫君を奪ったことを想起させられ、それに対して仏罰さえ感じているのである（8）。それがついに光源氏の中に「あはれ」の情が生じ、正月の「言忌もしたまはぬけしき」となり、生母に対する姫君みずからの返事を勧めるのであった。光源氏にとってわが世の永続の保証となる明石の姫君を得た代償として、明石の君に母子離別の悲しみを強いることになる。

いとうつくしげにて、明け暮れ見たてまつる人だに、飽かず思ひきこゆる御ありさまを、今までおぼつかなき年月の隔たりけるも、罪得がましく心苦しとおぼす。（一四頁）

后がねとしてかしずかれる姫君を見るにつけても、母子離別を強いられた明石の君の悲しみに思いをはせ胸が痛むのである。「罪得がましく」という言葉で思い出されるのは「薄雲」巻における大井山荘での母子離別の場面である。

姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出でたまへり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて、「乗りたまへ」と引くも、いみじうおぼえて、

（明石の君）末遠き二葉の松に引き別れいつか木高きかげを見るべき

えも言ひやらず、いみじう泣けば、さりや、あな苦しとおぼして、

（源氏）「生ひそめし根も深ければ武隈の松に小松の千代をならべむ

のどかにを」となぐさめたまふ。さることとは思ひ静むれ

ど、えなむ堪へざりける。（中略）道すがら、とまりつる人の心苦しさを、いかに、罪や得らむとおぼす。（一五五ー一五六頁）

姫君はまだ幼く事態の認識はできず、ひたすら母親の袖をとらえて「乗りたまへ」と言う無心な姿は見る人の涙をもよおさずにはいられない。わが将来の繁栄のために、人情に反する痛ましい処置であったとしても、娘を奪われる悲しみを明石の君に強いねばならぬし、また彼女への同情も禁圧しなければならなかった。しかし光源氏は引用文のように、わが運勢のために人情に反する行為を強いることはしても、決して明石の君をないがしろにはしなかった。むしろ彼女の悲しみを思いやり「薄雲」巻の母子離別の場面は光源氏に「罪」さえ認識させるのであった。明石の君はそのこらえてきた思いを歌に託し、光源氏も歌を詠んで明石の君を慰める。わが将来の繁栄のためにそうするしかなかったとはいうものの、姫君が成人した暁には、そのためにこらえてきた明石の君の苦労はきっと報われると光源氏はひそかに思っていたに違いない。それはこの「初音」巻になって、明石の君に報いる日が訪れてきたのである。「薄雲」巻の「いかに罪や得らむ」は「初音」巻の「罪得がましく心苦しとおぼす」と呼応し、姫君にみずからの返事をしたためさせることになる。まだ八才である明石の姫君は生母の歌に対し「ひきわかれ年は経れども鶯の巣立ちし松の根を忘れめや」と応えている。別れてから年月はたったけれども、生母を決して忘れることはありえぬというこの歌によって明石の君はどれほど慰められたであろう。とくに、この姫君の歌は光源氏が「御硯取りまかなひ書かせ」たというのだから、彼の思いも詠み含まれているのであろう。したがってこの光源氏の対応からは、母子離別を強いた悔やみと明石の君に対する深い思いやりを読み取れると言っても過言ではないであろう。

三

光源氏は、明石の姫君から花散里の「夏の御住ひ」に足を運んだのにつづいて玉鬘の住む「西の対」をも訪れていた。暮れ方になって「明石の御方」にたどりつく。光源氏は姫君に送った明石の君の歌に触発されたその「あはれ」さを抑えきれず、新春早々紫上方の「御騒がれ」を気にしながらも、あえて明石の君を訪れそこに泊ってしまうことになる。玉鬘十帖において、紫上方以外に光源氏の泊ったことが明記されるのは、五月五日の花散里とこの明石の君の二例だけであった。花散里の場合は、五月五日彼女の丑寅の町の馬場で、夕霧の引き連れてきた近衛府の官人たちによる騎射の催しが行われ、この夜晴れがましい女主人の役を勤めた花散里の許に光源氏が泊るのはまだ納得できるが、しかし「冬の御方」と名づけられる明石の君は、冬の季節を代表する巻に全く登場せず、この「初音」の巻の新春に

登場するのは、実に注目に値することであろう。時は元日であって正妻に準ずる地位にあるのが紫上なのだから、光源氏は春の町以外に泊ることは〈六条院の秩序〉に反することであり、許されない筈である。それを、敢えてこのようないわば反秩序的な場面が描かれているところから、光源氏に重んじられる明石の君の地位は紫上と相対化され、この時点ではむしろ格上げされているようには思えないであろうか。

一方、明石の君の方では、光源氏の訪れを迎える用意が周到に準備されている。

近き渡殿の戸押しあくるより、御簾のうちの追風、なまめかしく吹き匂はして、ものよりことに気高くおぼさる。正身は見えず。いづらと見まはしたまふに、硯のあたりにぎははしく、草子ども取り散らしたるを取りつつ見たまふ。唐の綺のことことしき縁さしたる茵に、をかしげなる琴うち置き、わざとめきよしある火桶に、侍従をくゆらかして、物ごとにしめたるに、裏衣香の香のまがへる、いと艶なり。手習どもの乱れうちとけたるも、筋かはり、ゆゑある書きざまなり。ことことしう草がちなどにも才がらず、めやすく書きすましたり。小松の御返りを、めづらしと見けるままに、あはれなる古言ども書きまぜて、

「めづらしや花のねぐらに木づたひて谷の古巣をとへる鶯

声待ち出でたる」などもあり。「咲ける岡辺に家しあれば」など、ひき返しなぐさめたる筋など書きまぜつつあるを、取りて見たまひつつほほゑみたまへる、はづかしげなり。

（一七―一八頁）

光源氏が元日に女君訪問を始めたのは、すでに「夕つ方」になってからであった。その理由を物語は「朝のほどは人々参りこみて、もの騒がしかりけるを」（一二頁）と説明している。紫上のところを離れ、明石の姫君、花散里、玉鬘と次々に訪問が行われ、明石の君のところにたどりついたのは、ちょうど日も暮れかかっていた頃であった。肝心の本人は姿を見せず、草子など取り散らかしてはあるものの、優雅な薫物の匂いが漂い、明石の地における充実した二人の仲を思い出させる「をかしげなる琴」がさりげなく置かれている。明石の姫君から送られてきた歌の返しを書き試みた跡を、光源氏は眺めながら戯れ書きなど加えているところへ、明石の君が現れる。その控え目な態度や、白い表着と対照的な美しい黒髪のかかった姿に、光源氏は思わず心ひかれてそこに泊ってしまったことになる。明石の君側の〈舞台装置〉は光源氏を引き止めるように、意図的に用意されたものであろう。

さらに、傍線部の「侍従」については、『薫集類抄』上に、

侍従。変名雅調

秋風蕭颯として心にくきおりによそへたるべし

とあるように、秋の香であることが分かる。季節から考えれば、正月は春なので、春の香を使うのが常識的であるし、冬の町の

女主人と称される点からすれば、むしろ冬の香がふさわしい筈であった（9）。この点について玉上琢弥氏が「春のものでないのを用いたのが、明石の御方の好みであろう」と述べられるのは、頗る示唆的な見解だと思う。新春の時、六条院の女主人である紫上の存在が最も重い筈なのに、明石の君は秋の香をたく行為によって春の町に住む紫上に対する一種の対抗心ともいうべきものを示しているのではないかと思う。このことに関連して、「梅枝」巻では「薫物競べ」が行われ、物語の中で「冬の御方」と呼ばれる唯一の例は、この場面に見られる。

対の上の御は、三種あるなかに、梅花、はなやかに今めかしう、すこしはやき心しらひを添へて、めづらしき薫り加はれり。「このころの風にたぐへむには、さらにこれにまさる匂ひあらじ」とめでたまふ。夏の御方には、人々の、かう心々にいどみたまふなるなかに、数々にも立ち出でずやと、煙をさへ思ひ消えたまへる御心にて、ただ荷葉を一種合はせたまへり。さまかはりしめやかなる香して、あはれになつかし。冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに消たれむもあいなしとおぼして、薫衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠の朝臣の、ことに選びつかうまつれりし百歩の方など思ひ得て、世に似ずなまめかしさを取り集めたる心おきてすぐれたりと、いづれをも無徳ならず定めたまふ（二五八―二五九頁）

紫上は「梅花」を調製し、花散里は「荷葉」をと、それぞれの季節の香を調合するのに対し、明石の君だけが「時々によれる匂ひの定まれるに消たれむもあいなしとおぼして」、冬とは無関係の薫衣香を調製することになる。この「薫物競べ」は「人々の心々に合はせたまへる深さ浅さをかぎあはせたまへる」（二五八頁）とあるように、女君たちそれぞれの性格や特性を試しているのは言うまでもない。結果として、紫上の調合した梅花は、判者の螢兵部卿の宮に絶賛されるほどの素晴らしいものであった。花散里は、六条院の女君たちのはなやかな中に「数々にも立ち出でずや」という謙虚さで、夏の香である荷葉を調合する。季節はずれで常識に欠けるところもあるが、人と争わない穏やかな彼女の美徳を表わしているようにも思われる。それに対し明石の君は、季節によって定められた香では、紫上に対抗できないとして薫衣香を選ぶ。これについて『岷江入楚』は次のように注している。

明石上は冬の御方なれは落葉を合はせ給へき事にや凡落葉はにほひのすくれてもはなやかなる所はなき物なりとそされは梅花荷葉なとを匂ひにけたれんとおほしてあはせ給はぬなるへし

ちょうど春の季節であるのに、冬の香を合せれば春の風情に心を尽くす紫上の香にきっと圧倒されてしまうから、明石の君がわざと冬の薫物を避けたように思われなくもない。事実紫上の調製した香は、判者の兵部卿の宮をして「このころの風にたぐへむには、さらにこれにまさる匂ひあらじ」と賞賛させるほど

であった。時宜を得た紫上の香に圧倒されることを「あいなし」と思う明石の君には、紫上に負けまいという対抗意識が明らかに存在しているし、「冬の御方」と呼ばれる彼女は挑み心から、冬の薫物を拒絶したことになるのであろう。このような挑み心も、光源氏に大事に待遇される背景があったからこそ生じたものと考えられよう。

四

「藤裏葉」巻以降になると、入内、出産、そして今上帝の即位と続く明石の姫君の栄華への道は、その生母である明石の君の存在を確実に高めていくのである。「初音」巻において、光源氏のこよなき愛着心を勝ち取り、これで「春の殿」で「罪得がましく心苦し」といとおしまれた、裏側の世界の明石の君が、逆転して光源氏を引きつけたのだから、あの明暗は一応相殺されたことになるかもしれない（10）。さらに、姫君との文のやり取りや、「螢」巻で姫君に物語を送る記述など、明石の君と后がねの姫君との確実なつながりは、これから展開していく物語における明石の君の重要さを浮かばせているように思われる。明石の君は出自こそ賤しいものだが、しかし彼女は、紫上にはなかった実子の成長という将来への望みと自負をもっているし、やがて明石の姫君の生母としての立場が強くなってくる。明石の姫君の皇子出産に際し、「この時わが御宿世も見ゆべきわざなめれば」と見えている。また出産の後には「さりや、よくこそ卑下しにけれ」と思いながら「わが宿世はいとたけくぞおぼえたまひける」とわが人生をかみしめる。姫君の成長と繁栄がすなわちわが人生の幸福である、との態度がこれらの言葉からうかがえる。すなわち、明石の君の人生、そしてその地位の上昇は明石の姫君と密接した関係にあるものであった。この「初音」巻における元日の夜の出来事は六条院の秩序を乱す行為のようであるが、光源氏と女君たちはただ単に正月の儀礼として対面するのではない。それぞれの対面の場面には、源氏と彼女らがそれぞれに共有してきた歴史がさしこみ、六条院における相対的位相があらためてあきらかにされるとともに、そのことがこれからのそれぞれに紡がれる生活史をさし示すことにもなるのであった（11）。そういう意味から考えると、「初音」巻における明石の君は、その後の姫君の栄華とともに確実な地位上昇の準備段階に入り、光源氏から重んじられたのも姫君の栄華という確固たる背景があってのことであって、決してその時だけの出来事でなかったことは確かであろう。

そのような、明石の君とうって変って、「初音」巻における紫上はむしろこれから物語の舞台から後退していく、その前段階の栄華の残像が描かれているように思われる。

光源氏と玉鬘の雅やかな恋の展開が中心に語られる玉鬘十帖において、紫上は一見この世界の傍らに居るように見られる。

しかし、玉鬘の六条院世界への介入は紫上を脅かす直接的な存在となり得なかったにしても、玉鬘にひたすら向かっていく光源氏の行為からもたらされた紫上の不安のかげは、確かに存在しているのである。光源氏の宰領する六条院の世界で、紫上はその位置を確保するためには、秋好中宮はもちろんのこと、玉鬘や明石の君とも相対化される物語の現実の中で闘わなければならない。「玉鬘」や「初音」さらに「胡蝶」巻に描かれる紫上は、観念的な絶対性だけに支えられたかろうじての姿であって、物語の展開する具体的な過程において、彼女は揺すぶられ、据え直される立場を余儀なくさせられたのだと考えられる。実際にも、元日の夜、明石の君と寝所を共にした光源氏を見るにつけても、紫上は六条院世界における自らの位置をかみしめることになる。明石の君が重んじられることは「なほおぼえ異なりかし」という光源氏の言葉にも端的に表れているように、明石の君という人物の重要性が強調されているのである。そして、それは玉鬘十帖を通じて第二部においても次第に明らかになっていく真実でもあった。女三の宮の降嫁が紫上に大きな打撃を与え、それによって六条院が崩壊されたと言われるが、この秩序崩壊の翳りは、すでに玉鬘十帖、とくに「初音」巻にも見られているのではなかろうか。

注

(1) 三谷栄一「物語る日と文芸の発生」(『日本文学の民俗学的研究』所収)
(2) 秋山虔「源氏物語「初音」巻を読む—六条院の一断面図—」(山中裕編『平安時代の歴史と文学　文学編』吉川弘文館所収)。増田繁夫「春秋の争い—玉鬘・初音・胡蝶」(『国文学』第32巻13号・昭62、11)
(3) 源氏物語本文の引用は新潮日本古典集成に拠り、括弧内に頁数を示す。「初音」巻以外からの引用の場合は巻名も併せて示しておいた。
(4) 東原伸明「六条院世界における明石君—「初音」巻の女君訪問を端緒として—」(『国学院大学大学院文学研究科論集』昭和59、1)
(5) 鉢本正行「春秋争い」(『講座源氏物語の世界』第5集・有斐閣・昭和59、1)
(6) 秋山虔「源氏物語「初音」巻を読む—六条院の一断面図—」(山中裕編『平安時代の歴史と文学　文学編』所収)。
(7) 熊谷義隆「明石君と季節—「冬の御方」考」(『山形女子短期大学紀要』昭和53、3)
(8) 注(6)に同じ。
(9) 注(4)に同じ。
(10) 注(6)に同じ。
(11) 注(6)に同じ。

(こ・しゅうびん　本学大学院博士後期課程)